

第一講

隨筆『徒然草』

学習目標

- 隨筆中に紹介された逸話と、作者の考えが述べられた箇所を区別して読解できる。
- 逸話中に登場する人物の心情変化を讀解し、適切に説明できる。
- 用言(動詞・形容詞・形容動詞)が確実に理解できているかを確認する。

【練習問題】

次の文章を読んで、あとの問に答えよ。

雅房大納言は、才かしくよき人にて、大将にもなさばやと思しけるころ、院の近習なる人、「ただ今、あさましきことを見侍りつ」と申されければ、「何ごとぞ」と問はせ給ひけるに、「雅房卿、鷹に飼はんとて、生きたる犬の足を斬り侍りつるを、中墻の穴より見侍りつ」と申されけるに、うとましく憎く思しめして、日ごろの御気色もたがひ、昇進もし給はざりけり。さばかりの人、鷹を持たれたりけるは思はずなれど、犬の足は跡なしことなり。虚言は不便なりども、かかることを聞かせ給ひて、憎ませ給ひける君の御心はいと尊きことなり。

おほかた、生けるものを殺し、傷め、闘はしめて、遊び楽しまん人は、畜生残害の類なり。よろづの鳥獸、小さき虫までも、心をとめてありさまを見るに、子を思ひ、親をなつか

〔重要語句〕

- 才
- かしくし
- よき人
- なす
- ばや
- あさまし
- 飼ふ
- 御気色
- たがふ
- さばかり
- 思はずなり
- 虚言
- 不便なり
- かかる
- いと
- おほかた
- よろづ
- なつかし

問二 A・B・Cの語を文中に適合する形に活用させよ。

A			
	B		
		C	

問三 傍線部1「才」・2「なさばや」・3「御気色」の語句の意味を記せ。

1			
	2		
		3	

問四 傍線部5「いかでかいたましたからざらん」を現代語訳せよ。

--

問五 傍線部4「君の御心」とあるが、どのような「心」か。本文に即して具体的に説明せよ。

--

㊦ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(設問の都合で、返り点・送り仮名を省いたところがある。)

貞観二年、京師大旱、蝗虫大起。太宗

入苑視禾、見蝗、掇数枚而咒曰、「一人以穀

為命。而汝食之。是害于百姓。百姓有

過、在余一人。爾其有靈、但當食我。無

害百姓。」將吞之。左右遽諫曰、「恐成疾。」

不可。」太宗曰、「所冀移災朕躬。何疾之

避。」遂吞之。因是蝗不復為災。

〔出典〕

『貞観政要』 卷八・務農

〔重要単語〕

- 命
- 汝
- 百姓
- 過
- 余
- 爾
- 左右
- 遽
- 疾
- 不可
- 所
- 朕
- 遂

〔重要構文〕

- 以A為B (慣用句形)
- 但—— (限定形)
- 当—— (再読文字)
- 無—— (否定形)
- 將—— (再読文字)
- 恐—— (推量形)

問四 傍線部②「將_レ吞_レ之」を、主語を補い「之」の指示内容を明らかにしながら現代語訳せよ。

問五 傍線部③「遂_レ吞_レ之」とあるが、なぜこのようなことをしたのか。その理由として最も適当なものを、次のイ～ホのうちから一つ選べ。

- イ 太宗は、人民のために蝗を飲めば自分の病気がよくなると固く信じていたから。
- ロ 太宗は、人民にとっては命にも等しい稲を食べる蝗に激しい怒りを覚えたから。
- ハ 太宗は、自分の悪政が原因で蝗の害が起こってしまったことを深く恥じたから。
- ニ 太宗は、蝗の害をわが身に引き受けることで人民の被害を防ぎたいと思ったから。
- ホ 太宗は、蝗の害に負けはしないという気持ちで人民に植えつけたと思ったから。

問六 傍線部④「蝗不復為災」は「蝗復た災を為さず」と読む。この読みに従って解答欄の原文に返り点を施せ。(送り仮名は不要。)

蝗不復為災